

「や……意地わ……っあー！ア、ん、ああっ!!」

先程我慢した分、ここぞと突起を捏ねくり回す。

ディーノもようやく与えられた確かな快感には抗えなかったのか、僅かも経たないうちに身を振り、感じるまま声を上げ始めていた。

しかし、目先の快楽に流されたままでは本当に求めているものを得られないと気付いたのか、迷いながらも快感を振り切るように切り出してくる。

「ロ、ロマ、あのな……ソコ、ホントはもっと……してほし……けど……弄られると……ピクンて、なって……上手く……喋れね……」

「じゃあ弄らないで挿んでるだけにしているから、早く言いなさい。二週間どんな風に、何を思っただけで過ごしていたのか」

「アああ……はい……」

無意識なのか、意識的なのか。

こちらが時折織り交ぜるご主人様口調に合わせるように敬語で返事をする、ディーノは愛撫が収まるのと同時にぼつぼつとこの二週間のことを話し始めた。

「最初の、五日くらいは……平気だった……ロマが出掛ける前に……いっぱいシてくれた、から……」

「ほう、それで？」

「ひあっ！ちよっ……や、止め……」

突起は緩く摘んだままで、もう片方の手をモジモジと

擦り合わされている腿の間に滑り込ませる。

たったそれだけなのに、ピクンとディーノの全身が跳ね上がった。

すぐに拗ねたような、怒ったような涙目の視線と声がこちらへと向けられる。

だが、突起は弄っていないと素知らぬ振りしていると、諦めたような溜息の後に続きが零された。

「こ、これなら、二週間くらい、余裕かなって……思ってた。でも……」

「でも？」

「っん！あはあッ……」

途切れた先を促すように内股をそろりと撫で上げると、腕の中の体がまたピクリと跳ねた。

そのまま久し振りの、しっとり吸い付くような肌の触感を楽しむようにゆっくりと掌を滑らせる。

腿の上を這い回る感触に、ディーノはしばらくの間喘ぎ身悶えていたが、何とか快感に耐えながら口を開いて言葉を繋げた。

「メール……仕事のことしか、書いてなかったし……電話で話せても……お前、用件だけですぐ切っちゃうから……何か、急に淋しくなっ……」

「……」

独白が途切れると同時に、腿を撫でていた手も自然と